

● テーマ ●

近代日中知識人の自他認識  
——思想交流史からのアプローチ——

Self-other Recognition and Modern Japanese and Chinese Intellectuals:  
An Intellectual History Approach



2012年5月15日(火)

● 発表者 ●

徐 興慶

SHYU Shing ching

台湾大学日本語文学科・研究所 教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Professor, Department of Japanese Language and Literature, Taiwan University

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

## 発表者紹介

---

徐 興慶

SHYU Shing ching

台湾大学日本語文学科・研究所 教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Professor, Department of Japanese Language and Literature, Taiwan University

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

### 略 歴

- 1992年 文学博士（九州大学）
- 1994年 台湾・中国文化大学日本研究所 副教授
- 1997年4月 天理大学国際文化学部 客員教授（～1999年3月）
- 2004年～現在 台湾大学日本語文学系 教授
- 2005年4月 関西大学アジア文化交流研究センター 客員研究員（～2010年3月）
- 2011年10月 国際日本文化研究センター 外国人研究員（～2012年9月）
- 2012年 文化交渉学（論文）博士（関西大学）

### 著書・論文等

- 『近代日中思想交流史の研究』朋友学術叢書（京都：朋友書店、2004年）
- 『朱舜水與東亞文化傳播の世界』東亞文明研究叢書78（台北：台湾大学出版センター、2008年）
- 『東亞知識人對近代性的思考』東亞文明研究叢書81（台北：台湾大学出版センター、2009年）
- 『東亞文化交流：空間・疆界・遷移』（共編）儒學與東亞文明研究叢書第二輯（上海：華東師範大学出版社、2012年）
- 『転換中のEUと「東アジア共同体」——台湾から世界を考える』（共編）日本学研究叢書7（台北：台湾大学出版センター、2012年）
- 『朱舜水與近世日本儒學的發展』東亞儒学研究叢書16（台北：台湾大学出版センター、2012年）
- 『他者としての異文化論説——張德彝の「航海述奇」をめぐって』『江南文化と日本——資料・人的交流の再発掘』（京都：国際日本文化研究センター、2012年3月）
- 『書評：馬淵昌也「東アジアの陽明学——接触・流通・変容」』『漢学研究』（第30巻第1期、2012年3月）

# 近代日中知識人の自他認識

——思想交流史からのアプローチ——

## 序 近代日中知識人の相互認識

日本・中国と西洋の間の学問・文化の交流の歴史において、「伝統」と「近代」的学問の衝突 (collision) は、アヘン戦争、あるいはペリーが来航した十九世紀後半以降に始まったものではない。ドナルド・キーンによれば、遅くとも『解体新書』(二七七四)、『蘭学階梯』(二七八三)の出版以降、日本の知識人の「蘭学」への関心は大波のように高まり、江戸社会にもともとあった儒教道徳に新たに「蘭学」が加わって、当時支配的な考え方であった儒教思想と蘭学とは深く抵触した。<sup>(1)</sup> この儒学と蘭学の最初の「衝突」は、伝統的道德社会とヨーロッパの近代医学という新しい学問の導入との対抗関係から始まった。

十九世紀後半以降、西洋の近代文明や産業技術が東アジア社会に押し寄せ、人々の生活・思想に大きな変化をもたらした。この外来思想の到来に際して、日本と中国の知識人は自国の伝統的な学問の優位性を守りつつ、西洋文明の実学を摂取しようとし、その矛盾の中で、「自他認識」を形成した。即ち、外来勢力（文明）に迫られた時に強烈に他者を意識してこれと対峙し、同時に自己についての認識が促されたのである。

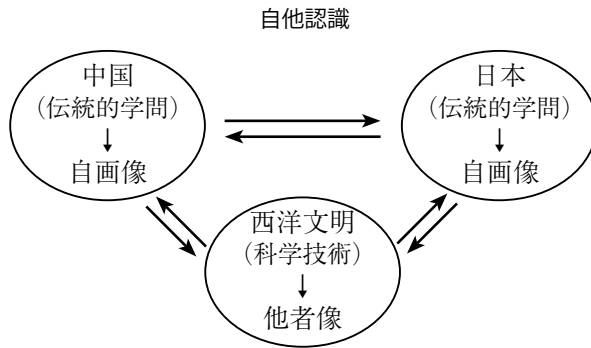
本報告は、近代日中知識人の思想交流における「自他認識」の枠組みを、中国の他者（日本・西洋）認識と日本の他者（中国・西洋）認識の異同から検討し、個々の知識人の知恵・思想・主張とその思想変遷のプロセスを明らかにする。そして伝統的な儒教と近代西洋文明との「葛藤（衝突）」の中で彼らが演じた役割を比較・解明する。とりわけ、十八世紀後半から十九世紀にかけて活躍した日中の知識人、箕作阮甫・塩谷宕陰・佐久間象山・中村正直・岡千仞（鹿門）・福沢諭吉・岡倉天心・王韜らが、「東洋」の意識を持ちつつ西洋社会と出会い、時世の必要に応じて、その知識（学問）を摂取する過程で次第に、「自我」と「他者」という異なる認識を持つに至ったことを検証する。そして、彼らが伝統的な学問と実用的な西洋の学問にいかに対応し、いかに自らの思想を形成していったのか、その「自他認識」の成立に焦点に当てる。

越境する人々の交流を「東アジア」的視野で考える場合、時間と対象を限定しない限

り、その意味は複雑で理解し難く、しばしば誤解を招く恐れがある。「東アジア」の概念は、時には日中の提携を象徴する「興亜（アジア主義）」に収斂されるが、「アジア」は「一つ」（日本）と解釈されがちで、侵略戦争の口実にもされてきた。また、これまでも「伝統と近代」の思想転換に関する論考は少なくない。<sup>(2)</sup> 本報告では、近代日中知識人の歴史意識とその思想変遷、さらに相互認識の軌跡がいかなるものであつたかを比較、検討していくこととする。

## 一 「自他認識」とは何か

近代化をめぐる日中の歴史を辿つてみると、十九世紀半ば、魏源（一七九四—一八五六）の『海國圖志』における地理的な南洋（西洋）の「発見」を契機として、東アジアの知識人は「西洋」世界についての知識を得るようになったと言えよう。<sup>(3)</sup> 一八六〇年代清末の中国に洋務運動が起こってから百五十年が経過し、また、日本において一八五三年のペリー来航から数えて約百六十年が過ぎた。これまで数多くの学者や政治家が東西文化は融合すべきであると主張してきたが、「融合」の見通しが付いたかどうかはいまだ検討の余地があるように思われる。二〇一二年の今日において、東アジアにおける近代化、そして「脱亜」と「興亜」という複雑な関係を考えるにあたって、どのような基準によるべきかが重



要な課題となる。本報告で述べる近代日中知識人の「自他認識」とは何か、その位置づけをまず明らかにしておく必要がある。

十九世紀の後半以降、東アジアは西洋列強の勢力に脅かされてきたが、この時期の日中両国の知識人が自らの「国家」、あるいは「国体」について考えた際、欧米諸国との交渉の中で、複数の天下（世界）が同時に存在することを次第に認識（覚醒）していったと考えられる。山室信一氏は「自らを知るためには自らを映し出す鏡なり、他者の存在が必要になつてくる」とするが、中国と西洋、日本と西洋の相互認識、または西洋文明の摂取をめぐって、中国と日本とは異なる「自我」と「他者」の「自他認識」が浮かんでくる。

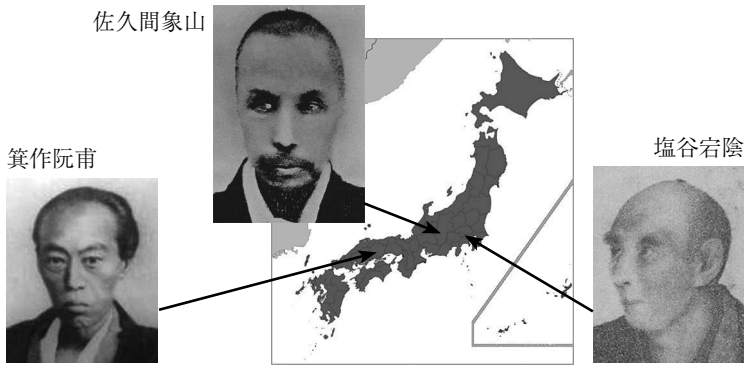
本報告では、「伝統」と「近代」の間と「興亜」と「脱亜」の間で葛藤する思想転換の枠組みの中で、近代日中知識人による「自他認識」の外面的・内面的な知識要素を明らかにすることを課題とする。すなわち、近代日中知識人が西洋思想

の受容によって成した「思想的変遷」とは何か、政治実体と文化価値とは何か。さらに、東アジアの近代化において、これらの知識人はいかなる位相を占め、いかなる影響をもたらしたのか。言い換えれば、本報告の目的は、この「自他認識」という視座を用いて、近代日中の知識人が西洋文明を摂取する際に、激変した時代をめぐって東アジアにおける西洋の学問や思想の普遍性・適宜性・実用性の是非を論争した経過を検証し、それぞれの知識人が持つ異なる思想交流の実態を復元することである。このような価値観や知恵は、これまで見落とされてきたのである。

## 二 思想変遷からのアプローチ

本節では、鎖国から開国に至るまでの知識媒体——西洋書の日本語訳、箕作阮甫による世界地理の知識の摂取、塩谷宕陰・佐久間象山による伝統的知識と新しい知識の取捨選択から生まれた学問的価値の創造——について考察する。

オランダ語に精通していた津山藩（現在の岡山県）出身の知識人箕作阮甫は、アヘン戦争が起きた一八四一（天保一二）年に親戚の大村斐夫に宛てた書簡の中で、「唐土大国甚且陥於攻掠威勢之下、本邦蒙受其害之期亦不遠矣」と述べているとおり、西洋勢力の東漸



を脅威と感じていた。

また、「文久三博士」の一人で「日東欧陽修」とも称される塩谷宕陰は、幕府の儒官であった。彼はアヘン戦争の情報を得ると、ただちに『阿芙蓉彙聞』、『籌海私議』等の書籍を著し、日本の海防を論じた。また一八五四年のペリー二度目の来航の際には「便宜二十ヶ条」を提出し、幕府に対して軍艦建造を建議した。彼の儒教観は、道徳本位主義であり、西洋文明の吸収は必ず道徳を基礎としてなされるべきだという認識を持っていた。即ち、日本を「己」とし、日本以外を「彼」とし、「己」を守るため、人々を西洋の知識から閉ざす「鎖国」を主張した。また、「彼を知る」ことを重視し、「己」を守る為に国外の情報を蒐集した。「夷漢雑居」は「己」を「彼」に対して暴露し、外国人が虚に乘じて侵入する機会になると考えた。

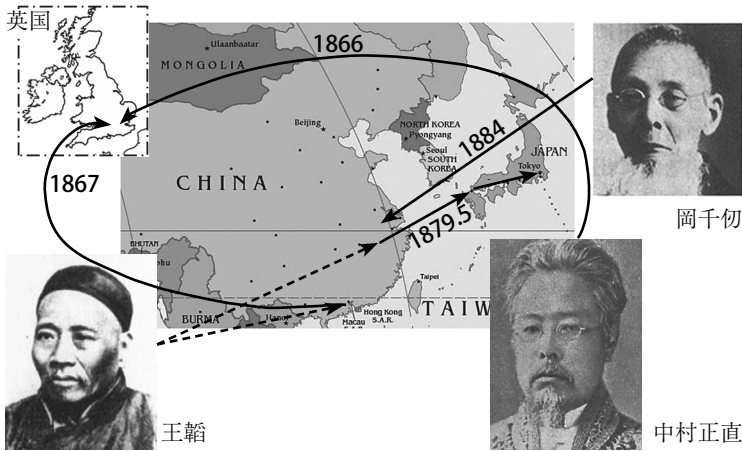
松代藩士の佐久間象山が外来の危機の克服を真剣に考え始めたのは、アヘン戦争に衝撃を受けた三十二歳以降のこ



とである。彼は『省魯録』で、「予年二十以後、乃知匹夫有繫一國。三十以後、乃知有繫天下。四十以後、乃知有繫五世界」と述べた。即ち、象山の思想は、対外知識に接触して、変化していったことがうかがわれる。折よく出版された箕作阮甫の『和蘭辞典』は、象山が「蘭学」を習い究めるための入門書となった。それ以前の象山は「程朱学」を「正学」とみなし、儒家思想を篤く信じていた。

(一)「漢学・西学並重」、「中西合一」

明六社のメンバーの一人であった中村正直は、東京学士会院における「古今東西一致道徳の説」(二八九〇・四・一四)と題する講演で、「支那の道徳の主義、所謂孔孟の教、所謂儒者の道なるものは、吾邦に於いても、応仁の朝より今日に至るまで、盛衰興廢、時に従つて一ならずと雖も、上は朝廷百官の間より、下は閭巷小民に至るまで、幾分か之を自然遵守執行して、社会の秩序を維持したるものなり」と述べ、また「吾国を救うに(中略)五倫五常の孔孟主義に非ずして何ぞ、抑も仏教も、ここに於いて與かりて力なきに非ず、然れども、士人、忠孝といい、廉恥といい、信義といい、侠烈といい、勇武という、これ等の諸徳、多くは是れ五倫五常に根ざし来れるなり」と語った。彼は、儒教文化が長く日本の社会秩序の維持や、人々の道徳向上に果たしてきた役割を高く評価した。



岡千仞

王韜

中村正直

蘇州出身の知識人王韜は、そのヨーロッパ遍歴の経験にもかかわらず、依然として伝統的な優越観を持ち、儒家の思想が西洋社会にも存在すると考えていた。彼は『漫遊随録』において、西洋世界について「礼義を以て、教えと為す」、「仁信を以て、基と為す」、「教化を以て、徳と為す」、「中国の古法に循ふ」等と表現しており、伝統的な「華夷」思想に基づいて西洋の国を「礼儀之邦」として肯定している。

中村正直と共に学んだ岡千仞は、昌平齋で佐藤一斎・安積良斎に師事したのち、私塾「綏猷堂」を開き、近代日本の漢学教育に邁進した。岡は戊辰戦争で尊王倒幕を主張したため、反対派に逮捕されて入獄したことがある。彼が関心を抱いたのは、王韜の『普法戦紀』に見られる海外情勢であった。岡は一八七九（明治一二）年五月から四ヶ月間にわたって日本に滞在した王韜と、二十八回に及ぶ会談を

行っている。彼は王韜と同様、西洋書の編集・翻訳による西洋知識の普及を志し、明治初期には『地誌略』の編纂や、『米利堅志』等の翻訳に力を注いだ。

## (二) 福沢諭吉の「儒教と西洋文明の二重接触」

一八八二(明治一五)年まで、福沢諭吉の唯一の目標は、「古習の惑溺」としての儒教に対する闘争であった。丸山真男は、「反儒教主義は殆ど諭吉の一生を通じての課題をなしたのである」と指摘している。<sup>(8)</sup>近代日本の西洋をモデルとした日本の近代化と「脱亜」の思潮を考える際には、まず福沢の「漢學の主義其無効なるを知らざる乎」(一八八三・三・八)、「儒教主義の成跡甚だ恐る可し」(『福沢諭吉全集』第八卷)、「儒教主義の害は其腐敗に在り」(一八九七・三・一五)などの儒教批判の発言が想起される。幼い時の福沢は、「少年時代から難しい経史を、やかましい先生に授けられて本当に勉強しました。左国史漢(春秋左氏伝、国語、史記、漢書)は勿論、詩経、書経のような経義でも、または老子、荘子のやうな面白いものでも、先生の講義を聞き、また自分で研究しました」(『福翁自伝』)と述べている。しかし、福沢は、「儒学は仏法とともに、各其一局を働き、わが国に於いて、今日に至るまで、此文明を致したることなれども、何れも皆、古学を慕うの病を免かれず」(『文明論之概略』)と指摘し、また、近代化を図る最中に、「東洋の儒教主義と西洋の文明主義とを

比較して見るに、東洋になきものは、有形に於いて数理学と、無形に於いて独立心と、此二点である」(『福翁自伝』)と述べている。さらに、「其経史の義を知て、知らぬ風をして、折々漢学の急処のような所を押さえて、話にも、書いたものにも、無遠慮に攻撃するから、是れぞ所謂獅子身中の虫で、漢学の為には私は実に「悪い外道」である。斯くまでに私が漢学を敵にしたのは、今の開国の時節に、陳く腐れた漢説が後進少年の脳中に蟠っては、とても西洋の文明は国に入ることができないと、飽くまで信じて疑わず」(『福翁自伝』)とし、陳腐の漢説によつて日本の少年を教育したのでは、文明国にはならないと警告していた。即ち、文明東漸の風潮に際し、福沢は、古学に面白さがあるとしながらも、西洋文明の研究こそより価値があるのであつて、東洋の封建、アジアの固陋・腐敗の学問の探求から脱出して、科学に立脚し実学を重んじる日本社会に変革し、近代化を進めるべきであると主張している。そして、日本人の近代文明の精神養成に必要な条件は、「難を先にして、易を後にし、先ず人心を改革して次いで制令に及ぼし、終に有形の物に至るべし」(『文明論之概略』)とする。日本人の心の変革にとつて、最大の障碍は儒教である、と福沢は指摘している。長期にわたつて日本社会を支配した儒教思想は、日本の国際社会との交流にとつては停滞不流の元となるものであると気付いた福沢は、「その古風、旧慣に恋々するの情は、百千年の古に異ならず。この文明日新の活劇場に教育のことを論ずれば、儒教主

義と言ひ、学校の教旨は仁義礼智と称し、一より十にいたるまで外見の虚飾のみを事として、その実際においては真理、原則の知見なきのみか、道徳さえ地を払うて残酷、不廉恥を極め、なお傲然として自省の念なきもののごとし」(一八八五・三・一六、「脱亜論」と述べている。一見、福沢は明治日本社会における儒教の存在価値を全面的に否定したかのように見えるが、果たして、そうであろうか、福沢は、忠孝仁義などの説が社会人道の教育面において捨て難いとし、儒教思想を尊敬する面も見られる。李曉東は、「前期における福沢は、いわば戦略的に、敢えて儒教に対する肯定的見解を表明することを避けた」とし、「儒教における民本思想、あるいは民本思想より導きだされた易姓革命思想に注目し、またはそれを利用した」と指摘している。<sup>10)</sup> 調べてみれば、福沢は儒教思想に対し、賛否の二重性を持つていたといえる。本報告では福沢の理念と実態との乖離を見極めるために、その儒教批判の分析を試みた。

### (三) 岡倉天心の「アジアは一つ」論

従来、岡倉天心のアジア観は、一部の知識人による東アジア意識やナショナリズムを代表するものとして注目されてきた。先に述べたように福沢が積極的に西洋文明の「良さ」を日本社会に取り入れようとしたのに対し、岡倉天心はやや異なっているように見える。

彼は無視されつつあるアジアにおいて東洋文明の共通性とその価値を肯定し、西洋と対等な理論「アジアは一つ」を呼び覚ますものとして、一九〇三（明治三六）年に *The ideals of the East with special reference to the art of Japan*（『東洋の理想』）を英文で刊行した。同書をはじめとするいくつかの著作を通して、彼は美術界のみならず言論・思想の分野でも注目される存在になっていった。同時に、彼のアジア観もこれらの文化活動のなかで形成され、展開されていった。彼の『東洋の理想』の「アジアは一つ」論は、三十年サイクルで関心を集めてきた。その内容について、松本三之介は、本来、政治的なレベルでの一体性を意味するのではなく、哲学的な思想あるいは志向の共通性と捉えている。つまり、アジアは、多様性の中に統一を求め、多様な個性を受け入れつつ一つの全体を形づくろうとする志向性を共有している点で「一つ」であり、アジアに特徴的な「不二元」の観念によって一つになりうると述べ、天心は一体としてのアジアの発見を呼び覚ますものとして、ヨーロッパとの対決という問題があると論じている。<sup>[1]</sup>

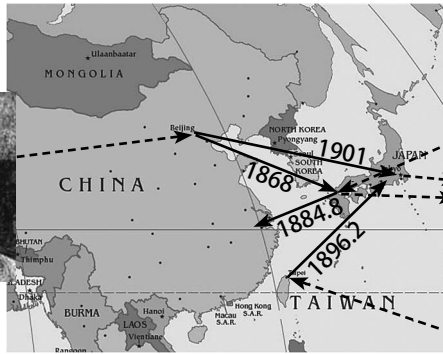
下崇道『日本近代思想のアジア的意義』は、国粹主義とアジア主義の思想をあわせ持つ知識人として、天心を取り上げている。そこでは、天心の「アジアは一つ」の思想を「日本及び東洋における伝統文化の価値の肯定である」、「文化多元論の提唱である」、「美々精神」アジア＝東洋の理想という理念である」などと捉え、アジア文明の価値を肯定し、西

欧列強の帝国主義に抵抗する原理として「一つであるべきアジア」を対置した、と述べている。<sup>(12)</sup>

岡倉天心は日露戦争直前の一九〇四（明治三七）年に、『日本の目覚め』(The Awakening of Japan) を公刊した。彼は、「蹂躪された東洋人にとつては歐羅巴の榮譽は只亞細亞の屈辱である」（白禍）として「興亜」の意識を明らかにし、その目的を、第一章「亞細亞の夜」に明瞭に表現している。即ち、彼は、「最近に至るまで西洋は決して日本のことを真面目に考へたことはなかつた」として、「西洋は廣大な諸方面から自由に情報を得ることが出来るにも関わらず、今日尚實に多くの誤解を我々に關して抱いてゐる實情を見れば悲しむべきことである」、「東方亞細亞文明の歴史が今尚一般西洋人には全然知られてゐない」などと指摘し、西洋諸国の日本、あるいは東アジア文明の歴史に対する誤解や無関心を訴えた。他方、同書では、「我々が支那と戦端を開くことを餘儀なくせられたのは、千八百九十四年に半島の獨立が支那に脅された時であつた。千九百四年我々が露西亞と戦へたのも同じ朝鮮の獨立のためであつた」、「十年前支那よりも一層の強敵に對する勝利によつて、更に強い自信を與へられるであらうと思ふ」（日本と平和）と、東亜の解放と戦争のイデオロギーが明言されるとともに、日本文化の特殊性、民族的愛国心に溢れた言説が散見される。ここには、天心の「興亜」に對する思想の変遷が見て取れる。彼は「ア



張德彝



小室信介



李春生

ジアは一つ」論を軸に、東洋文化は西洋文明に優ると興亜的に主張した思想の背景及びその原因を検討した上で、彼が持つアジア観そのものが、「対抗」と「融合」の二つの現象から成っていることを見出した。さらに、未来において東西文明の融合について、いかに構築すべきかを試論した。

### 三 近代日中知識人の歴史意識

本節では、近代日中知識人の「自他認識の思想変遷」に基づいて、日本・台湾・中国の知識人の思想構造を検証する。とりわけ、小室信介・李春生・張德彝・梁啓超・林獻堂や戴季陶らの歴史意識と相互認識の実態を明らかにする。

(二) 近代日本の自由民権運動の推進者であり、新聞記者でもあった小室信介(一八五二—一八五)の



## 近代中国、台湾知識人の日本経験



梁啓超



戴季陶

1905-1907, 留学  
1913.2, 孫文の秘書  
1919.10 ~, 国民党要員



林獻堂

中国紀行文『第一遊清記』を検討し、彼が中国観察を通して、いかにして「他者」と「自我」を区別していったかを考察する。さらに、彼がその中国観を変化させていく中で厳しく中国を批判した側面を指摘する。(二)「台湾史上第一の思想家」と呼ばれる李春生(一八三八—一九二四)の『主津新集』、『東遊六十四日隨筆』を中心に検討し、彼の(1)「台湾事件」に対する見方、(2)「棄地遺民」としての悲しみ、(3)維新富国への切望と帰属意識の転換、(4)強い宗教観の四点を考察することによって、清国・台湾・日本の間で揺れ動くアイデンティティを検討し、その「理想祖国」と「現実大陸」、さらに文化と政治の二重認知に対する思想の転換を見る。(三)中国「京師同文館」の一期生であり、のちに清朝の駐英大使になった張德彝



梁啓超

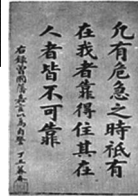
1911年4月  
長女上陸し、  
台北、台中  
(霧峯)を  
訪問



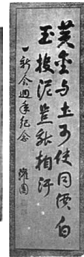
1907年3月  
日本で初対面



林獻堂  
台湾民族運動先駆者



林獻堂遺墨



(二八四七—一九一八)の二冊の日本見聞録、『經日本東渡記』と『七奇述』を中心に検証する。とりわけ、張德彝の二十七年間に及んだ諸外国の遊歴経験のうち、「他者」としての日本にどのような眼差しが向けられ、かつ遊歴後にいわゆる「精神の開国」がどのように変化し、そして、そのことに明治日本の思潮がどのように関与したのか、彼の「華夷思想」を中心に考察する。(四) 第四章では、近代日本と関わりの深い梁啓超、戴季陶と台湾の知識人林獻堂の三人を取り上げる。

亡命者としての憂国論を持ち、立憲と国民国家の成立を望んだ梁啓超。中国—日本—台湾を越境した経験によって、彼の植民地台湾における自己認識は奥深いものとなり、台湾知識人の林獻堂との思想交流をめぐって、さらにそのアイデンティティは変化していく。この間の経緯を考察し、そ

## 梁啓超と台湾

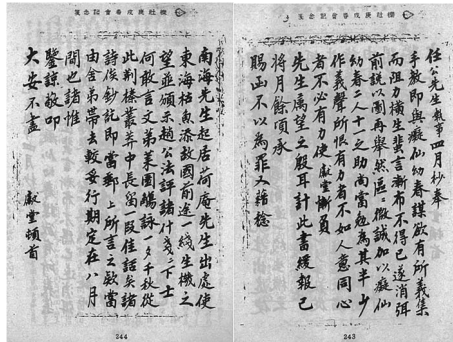


1911年4月、台中霧峯にある林献堂の邸「菜園五桂樓」を訪れる。



「櫟社」の台湾知識人と交流

## 梁啓超宛ての林献堂書簡（国立台湾文学館所蔵）



それぞれの日本観を比較分析する。

戴季陶は日露戦争の最中、一九〇五年に日本に赴き、以後六年間にわたって留学生活を送った。その思想変遷を理解するには、彼の『我的日本観』（一九一九）、『日本論』（一九二八）及び日本滞在の経験が重要な手掛かりになる。最近、張玉萍は、政治と日中関係の視点から、戴季陶の日本観の形成を「日本敵視論」、「日中提携論」、「批判的

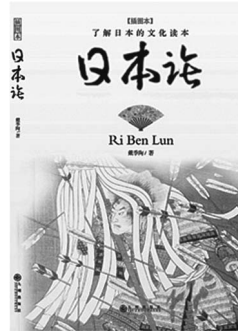
## 戴季陶の日本観

日本研究を促す戴季陶の動機

- (1) 『我的日本観』を書く動機      (2) 『日本論』を刊行する背景



1919年8月『建設』雑誌に掲載



1928年上海で出版

提携論」、「対決、連合論」という四つの段階で論じた<sup>(13)</sup>。戴季陶は、近代化しつつある「他者」日本を厳しく批判する一方で、中国人の日本認識を、「我々中国人は逆に、ただ一途に排斥し、反対するだけで、殆ど日本の文章を読もうともせず、日本語を聞こうともせず、日本人を見ようともしない有様である。これは全く「思想における鎖国」、「知識における義和団」というも同然である」(『我的日本観』)と、閉鎖的な中国人の対日観を忌憚なく批判している。また彼は、「中国、インド、ヨーロッパから輸入した文明を除けば、日本には何もない。研究に値することはない」という従来の中国人の排日的認識が誤りであることを指摘している。戴季陶にとっては、二十世紀になって次第に日中関係が緊迫するにつれ、

中国も、日本も、「愛恨交じった」存在になったに違いない。例えば、明治維新について、彼は次のように述べている。

東洋の全体から見ると、日本の維新の成功は、確かに有色人種自覚の起点であり、東洋民族復興の起点であった。<sup>(14)</sup>

戴季陶は、日本人に共通する自信と向上心によって、民族主義を復興させ、近代国家の樹立に成功したと見ていた。本報告では、戴季陶がその内側から認識した文化や民族性といった日本観をいかに中国人に伝えたか、その日本観はどのように変遷したのかを、「自他認識」の視点で考えた。

#### 四 近代日中知識人の共通点——翻訳を通じた西洋文明の摂取

(一) 「漢訳西書」「和訳西書」から「和書漢訳」へ

明清交替期の中国は、基本的に海禁政策を取っていた。また日本は江戸時代初期から鎖

国政策を実施していたため、十九世紀後半まで、外交上は西洋との交渉が途絶えていた。しかし、東西洋における貿易活動が盛んになるにつれ、西洋の宣教師や知識人、商人らは、洋書を中国や日本に「持渡」、舶載するようになった。特に、天主教や西洋の科学技術に関する書籍は、彼らの手によって続々と東アジアに伝えられた。中国では、清末以降、「天津条約」（一八五八）と「北京条約」（一八六〇）によって、天主教とキリスト教の禁止が解除され、外国宣教師が相次いで渡ってきた。宣教師らは布教と同時に西洋の文化を中国社会に広げていき、多分野の「西書（洋書）」を中国語に翻訳するようになった。さらに、これらの「西書」を印刷・出版するため、通商港の上海に「書館」を設置した。

日本では、江戸時代中期から長期にわたって、大量の漢籍が長崎港を経由して流入した<sup>(15)</sup>。また、一八六二年に幕府の官船「千歳丸」で上海に渡航した中牟田倉之助の「上海渡航記事」によると、七種類に及ぶ膨大な翻訳書が日本に持ち込まれた<sup>(16)</sup>。

十九世紀後半になって、キリスト教思想の流入を封鎖する禁書令はいまだ解除されていなかったが、中国で出版された「漢訳西書」が日中間の活発な貿易、文化交流を通して密かに日本に流れ込んだ事例は少なくない<sup>(17)</sup>。しかし、この現象は明治維新以降に逆転し、大量の「和訳西書」が日本から中国に輸入されるようになった。山室信一氏は、これを「欧州↓日本↓中国という知の流通経路が切り開かれた」とし、「文化倒流」の現象が生じた

とみる<sup>(18)</sup>。この「文化倒流」の始まりは、張之洞（一八三七—一九〇九）が『勸学篇』（一八九八）で唱えた「中体西用論」に遡ることができる。即ち彼は、「西学は甚だ繁、およそ西学の切要ならざるものは、東人すでに刪節して、これを酌解す。中・東の情勢、風俗相ちかく、彷徨しやすし。事半ばにして、功倍すること、これにすぐるものなし」と述べ、「西学」が中国の近代化にとつていかに重要かを指摘し、日本への留学生派遣を主張した。「中体西用論」は結局失敗したが、戊戌政変で日本に亡命した康有為・梁啓超らをはじめとし、孫文の辛亥革命に至るまで、多くの中国人青年が日本へ留学する風潮が生み出された。彼らは改革運動のモデルとしてこれらの「和訳西書」を中国に持ち帰り、知的な「文化倒流」を促進した<sup>(19)</sup>。

(1) 徐光啓・李之藻・嚴復

近代中国における翻訳書を通じた西洋知識の摂取の歴史を辿って見れば、明末上海出身の徐光啓（一五六二—一六三三）、浙江杭州出身の李之藻（一五六五—一六三〇）が想起される。彼らは中西文化交流史における翻訳の先駆者として知られている。徐光啓はマテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552-1610）と、古代西洋の数学経典『幾何原本』（前六卷、一六〇七）、『測量法義』を共訳し、イタリアの宣教師 P. Sabbathino de Ursis（1575-1620）と、水利書の『泰

『西水法』(六卷)を、P. Franciscus Sambiasi (1582-1649) と、『靈言蠡勺』(二卷)をそれぞれ共訳した。徐光啓はこれらの「漢訳西書」によって、中国の官僚や上流階級の知識人に西洋の数学・水利・天文・哲学などを伝えた。また、李之藻はイエズス会宣教師と親しく、受洗してキリスト教徒となった。彼はマテオ・リッチと、共訳で算術書『同文算指』(十一卷、一六二三)を公刊したほか、天文学の『経天該』、哲学の『名理探』(六卷)、『寰有詮』(十卷)、地理学の『坤輿万国全図』などの翻訳書を世に出した。何と云っても、李之藻の最大の功績は、西洋科学翻訳書の濫觴らんしょうといわれる『天学初函』<sup>②①</sup>の編纂と公刊であり、近代中国における西洋知識の摂取を大きく前進させた。

また、近代西洋の「富国論」、「自由論」などの思想を翻訳・受容した中国の知識人に、嚴復(一八五四—一九二二)がいる。彼は、日清戦争の敗北後に中国が弱体化したのは、「民力がすでに疲れ、民智がすでに痺しいものになり、民徳がすでに薄いものとなった」<sup>②②</sup>ためであると指摘し、同時に時宜を得られない儒教の教えを厳しく批判して、徹底的に「西学」を学ぶべきであると主張した。彼は中国の苦境に憂悶するインテリであり、一八九八年に代表作となる翻訳書『天演論』を出版して、西洋社会の知恵の源泉を語った進化論「優勝劣敗」、「適者生存」の概念を中国に初めて移植したのである。<sup>②③</sup>



(2) 康有為

清末改革の思想家康有為（一八五八—一九二七）は、一八七九年、二十二歳ですでに西洋学問に接触していた。彼は『自編年譜』の中で、次のように述べている。

得『西國近事匯編』、李圭『環遊地球新録』及西書數種覽之。薄游香港、覽西人宮室之瓊麗、道路之整潔、巡捕之嚴密、乃始知西人治國有法度、不得以古舊之夷狄視之。乃復閱『海國圖志』、『瀛環志略』等書、購地球圖、漸收西學之書、為講西學之基矣。<sup>23</sup>

〔西國近事匯編〕、李圭の『環遊地球新録』及び洋書數卷を手に入れて閲覽した。香港へ赴き、豪華絢爛な西洋人の屋敷や整然とした街路、嚴密な法律などを見聞したことで初めて、西洋人が法制度によって国を治めていることを知り、それ以来、旧来の夷狄觀を持つことができなくなった。『海國圖志』『瀛環志略』などを読み返し、地球儀（地図）を購入したり、洋書を蒐集するようになった。これらは洋学を説く基礎となった。〕

西洋の学問や知識が収録されたこれらの文献は、植民地香港の英華書院や上海の墨海書館、江南製造局翻譯館、北京同文館などで入手されたと考えられる。康有為は外国の知識が多く掲載されたこれらの文献を読むことによって、それまで自らが持っていた中国の伝

統的な学問知識よりもさらに国際的視野を広げ、新学Ⅱ漢訳西書的重要性を感じ取った。康有為の『自編年譜』（一八八六）によると、彼は広州総督の張之洞に西洋書的重要性を次のように伝えている。

中國西書太少、傅蘭雅所譯西書皆病醫不切之學、其政書甚要、西書甚多新理、皆中國所無、益開局譯書、最為要事。<sup>(2)</sup>

（中国には洋書が少なく、ジョン・フライヤーが訳したものは医学書ばかりである。西洋の制度沿革を記述したものは極めて重要であり、洋書にそのような新学が多い。それらは中国にないものばかりであり、直ちに翻訳局を開設し、洋書を訳すことが必要である。）

一八八六年、日本はすでに明治維新期に入り、近代化を進めるために「文明開化」を推進し、さまざまな分野の和訳洋書が多数普及しつつあった。他方で、当時、中国にはイギリス人ジョン・フライヤー（傅蘭雅 John Fryer, 1839-1928）による医学の翻訳書があるのみで、新しい政治理論を述べる西洋書は皆無に等しかった。これを懸念した康有為は、翻訳局の開設を呼びかけた。

一八九五年四月、日清戦争敗北によって大きな衝撃を受けた中国では、張之洞が自強運

動の一環として、「中学を体とし西学を用とする」と唱え、日本を媒介として西洋文明(学問)を撰取する方針を固め、思想・制度の輸入が澎湃として起こった。これによって、多くの知識人が政治体制の「変法」「革新」を求め、近代的な政治思想や体制を根付かせようとした。康有為は政治改革を図るため、『日本変政考』(一八九六)を編纂して明治日本の著作・翻訳に目配りし、また『日本書目志』(一八九六・二二—一八九八・五)を編集・出版し、和書漢訳の実現に積極的に取り組んだ。これら二書は光緒帝に献呈され、その改革への意志を固めさせる役割を果たした。翻訳書出版の効力について、康有為は『日本書目志』自序で次のように述べている。

泰西百年來諸業之書百萬億千、吾中人識西文者寡、待吾數百萬吏士識西文而後讀之、是待百年而後可、則吾終無張燈之一日也。故今日欲自強、惟有譯書而已。<sup>(26)</sup>

(百年來、西洋で出版された各領域の書物は数えきれないが、欧米語を解する中国人は少なく、数百万の役人に欧米語を学ばせ、これらの書物を解読させるのに百年もかかってしまった。これでは明るい未来はない。自強の道を開こうとするなら、ただひたすら書を訳すのみである。)

『日本書目志』は十五巻で構成され、計七、七四四種が十五門（分野）に分けられている。分野別に数を見ると、「生理（医学科学）」（三六六）、「理学」（三九二）、「宗教」（一〇八）、「図史（地理、歴史）」（九〇二）、「政治」（四三六）、「法律」（四四九）、「農業」（四〇四）、「工業」（二二七）、「商業」（一五七）、「教育」（七四〇）、「文学」（九〇三）、「文字言語」（八三三）、「美術」（七二〇）、「小説」（一〇五六）、「兵書」（五二二）となっている。そして、各「類」に、康有為の見解を述べた「按語」（コメント）一〇九条が附されている。<sup>27</sup>

例えば、『日本書目志』第四巻「図史門」（地理、歴史分野）には、地理総論、世界地理、日本地図、世界地図、世界史、日本史、伝記など計二十五類、九〇一種の図書が収録されている。当時の中国にとって、世界地理や歴史の知識の摂取がいかに重要であったか、康有為の狙いが伺える。

また、第五巻「政治門」には、十七類、四三六種の外国政治学の図書が挙げられている。外国政治の知識を吸収する方法として、康有為は、「然譯泰西之書而能保養其民以自強、其政治亦可借鑒矣（洋書を訳せば、民を自立させ、自強することができる。西洋の政治の規範にも照らし合わせることができる）」と述べ、<sup>28</sup>和書漢訳を媒介として西洋政治の先例に鑑みることが必要であると主張している。さらに康有為は、法律を変えることによって中国は強くなるとし、第六巻の「法律門」には三十二類、四四九種の図書を網羅している。「考日本之

能治西民、蓋自變律始。累遣學生出使、考察西律、斟酌厥宜而施行之。及其施行、經幾許艱阻、而后永定焉（日本はしばしば學生を海外に派遣し、西洋の律法を視察させ、その長所を適宜取り入れてきた。律法を変えることによつて、西洋諸国に対抗できるようになった。実行には多少の困難が伴つたが、のちには日本の法律として定着した<sup>29</sup>）と述べ、特に西洋の法律を撰取するため、日本の人材派遣、考察、実施などのプロセスについて注目している。即ち康有為は、「維新变法」が中国の政治改革における重要策であると見ていた。日本の法律圖書の利用については、「若采變律法、因日本最近已成之文章、再加裁變、力省而功溥、事切而弊少。（中略）其商法、學法、礦法、軍法、社會法、銀行法、商船法、保險法皆新法、極詳密、吾皆可取爾（律法を変えるには、最近の日本の法文を参考にして修正すれば、少しの労力で大きな成果を収め、弊害も少くて済む。（中略）日本の商法、學法、鉱法、軍法、社會法、銀行法、商船法、保險法はすべて新しい法律で、極めて緻密なものであるから、我らはすべて取り入れるべし）」とし、すでに整備された日本の諸分野の法律知識を取るべきであるという。同時に、『國憲泛論』『各國憲法』『米國憲法史』『万国現行憲法比較』『内外臣民公私權考』なども参考にすべきとする。

さらに第十卷「教育門」では、十七類、七四〇種の教育圖書を取り上げて、日本の西洋教育の知識撰取に関する方法を、「日人用泰西教育法、自學校之詳、教員學室之制、下及

女子商賈士卒、科級之詳、解題讀本之精、備哉燦爛。尚慮中文深奧、雜以伊呂波之片假名、以達其意。不求古雅、但思速下、于是舉國皆識字知學。日之驟興、良有此故（日本人は西洋の教育法を採用し、それは学校や教員制度から、女子・商人・兵士の教育にまで及んでいる。カリキュラムは詳細で、解題・読本いずれも完成度が高い。ただし、漢文は難しいため、カタカナでの表記がなされた。風雅を求めず、意味の伝達に力を入れたことによって、国民皆が文字を解し、学ぶことが可能となった。日本が発展したのはこの故である）」とし、日本の教育政策を具に觀察した。言い換えれば、康有為は『日本書目志』によって、政治改革や西洋理解の必要性を中国の官僚、知識人たちに伝えようとしたのである。<sup>(31)</sup>

### (3) 王国維

翻訳書を通して西洋及び日本の知識摂取に重要な役割を果たした人物には、もう一人の知識人王国維（一八七七—一九二七）がいる。彼は、近代中国における「新學術」の開拓者と称され、また翻訳理論家としても知られている。二十以上の翻訳書が普及し、中国に多大な貢献をなした。二十四歳で東京物理学校へ留学し、『歐羅巴通史考』（一九〇〇）を著すとともに、物理学の『勢力不滅論』（一九〇〇）、*The Theory of the Conservation of Energy*、農学の『農事会要』をそれぞれ翻訳した。また二十七歳で『西洋理論学史要』（一九〇三）

の翻訳書を刊行した。王国維は辛亥革命後の一九一一年一月に再び渡日し、五年間にわたって京都帝国大学で学び、その間にも多くの翻訳を残した。例えば、自然科学の分野では、『農学・地理学・物理学・生物学、また人文学の分野においても、『教育学』（立花銑三郎述）、『倫理学』『心理学』（ともに元良勇次郎著）、『哲学概論』（桑木巖翼著）などを刊行し、それらの翻訳書を通して、洋学は中国文学の近代化に影響を及ぼした。<sup>(32)</sup> 王国維は、「論新學語之輸入」(『教育世界』第九六号、一九〇五・四)で次のように述べている。

日本之學者、既先我而定之矣。則沿用之、何不可之有？余雖不敢謂用日本已定之語必賢于創造、然其精密、則固創造者之所以不能逮。

(日本の学者は既に我らより先に立ち、洋書翻訳の重要性を見抜いてこれを実行した。これらの翻訳用語を用いて何の不都合があるう。私は、日本が定めた用語が必ずしも一からの創造よりも賢明なものとは敢えて言わないが、それらの用語の表現の適切さは、創造者も及ばないところである。)

彼は、近代中国を改革するにあたり、新しい学術用語(日本語)の輸入と精密な日本の翻訳書とによって、知識を摂取する道を開こうとしたのである。

(4) 梁啓超

康有為が翻訳書によつて西洋の知識を撰取しようとした一方、彼の弟子の梁啓超は、一八七九年、「大同訳書局叙例」でその関心の所在を次のように明確に示した。

舉一國之才智、而學西文、讀西籍、則其事又迂遠、恐有所不能待。(中略)今不速譯書、則所謂變法者、盡成空言、而國家將不能收一法之效。雖然官譯之書、若京師同文館、天津水師學堂、上海製造局、始事迄今、垂三十年、而譯成之書不過百種、近且悉輟業矣。然則以此事望之官局、再自今以往、越三十年、得書可二百種、一切所謂學書、農書、工書、商書、兵書、憲法書、章程書者、尤是萬不備一、而大事之去、固已久矣。是以憤懣、聯合同志、創為此局。以東文為主而輔以西文、以政學為先而次以藝學、至舊譯希見之本、邦人新著之書、其有精言、悉在采納或編為叢刻、以便購讀。<sup>(3)</sup>

(二國の才智ある人々を挙げ、彼らに欧米語を学ばせ洋書を読ませる事は、迂遠なことであり、我々は待つていられないだろう。(中略)今迅速に洋書を翻訳しなければ、所謂「変法」は空言となつてしまい、国がその効果を得ることはできない。官訳書はあるが、京師同文館、天津水師學堂、上海製造局など、翻訳を始めて三十年が経つても完成した書は百種に過ぎず、しかも近年はその翻訳事業を止めてしまつている。このペースで後三十年



やっつけていても、二百種の翻訳書しか手に入れることができない。あらゆる学書、農書、工書、商書、兵書、憲法書、章程書などは方に一つも備えられず、無視されて久しい。我々はこの現状に憤懣し、同志を連ねてこの翻訳局を創設した。東文を以て主とし、西文を以てそれを補い、また政学を以て先と為し、芸学を以て次と為す。希少な旧翻訳書から邦人の新著の書まで、その中に精言がありさえすれば悉く採納し、あるいは編集して叢刻し、購読できるようにする。」

梁啓超が強調したのは、師康有為と同様、西洋の知識を撰取する際に、人材を西洋に派遣してその知識を撰取するのではなく、翻訳書によるということであり、それまでの中国政府による翻訳では遅すぎると指摘した。政治に関する翻訳書の刊行は一刻の猶予も許されないとし、極めて切迫した「改革的使命」の姿勢を見せている。また、中国を救う道は西洋の学術思想の著作を翻訳・吸収・実践することにあるとし、「世界の学説を上限なく輸入し尽くすべきである」と主張した<sup>34</sup>。彼は日本に亡命後の一八九八年二月に東京で『清議報』を創刊し、「論学日本文之益」（『清議報』第十冊）において、「日本は維新より三十年來、広く知識を世界に求めて翻訳、著述し、有用な書籍は三千種類を下らない。（中略）中国人がこれを得れば、その智慧は忽ち増し、人材も忽ち出ることが可能である」と述べ、

「和訳西書」の重要性を強調している。

中国が和訳西書をいかに素早く中国語に翻訳し、それを普及し、効果的に運営すべきであるか、梁啓超は自らの経験に基づいて次のように提案する。(一) 翻訳すべき書籍を順番に選び出す、(二) 翻訳による名詞、述語の規則を定める、(三) 翻訳の人材を育成する。<sup>(35)</sup>すなわち梁啓超は、中国の維新変法が成功するか否かは、翻訳書を通じた知識の普及、また国家の強弱とも深く関わっていると看做している。いわば、彼は西洋書が提供する知識に従って、急進的に中国を変革しようとする姿勢をとったのであり、その役割は康有為と同様に重要であったといえる。

#### (5) 王韜

近代中国の翻訳事業に大きく貢献した王韜は、一八七九年にはすでにヨーロッパ遍歴を終え、日本を訪問していた。彼は一八四三年に創立された「墨海書館」(The London Missionary Society Press) に十五年間勤め、宣教師の協力の下、『重學淺説』『光學圖説』『格致新學提綱』『中西通書』『華英通商事略』『西國天學源流』等の科学技術に関する西洋書籍の翻訳に携わった。また、王韜は長い香港逃亡生活の間に、英国の漢学者ジェームズ・リッジ(James Legge, 1815-97) と共同で儒家經典を翻訳している。その成果は、『尚書』(第

三卷、一八六五）、『詩経』（第四卷、一八七一）、『左傳』（第五卷、一八七二）等の『中国経書』（The Chinese Classics）シリーズとして西洋で出版された。王韜は、「西書漢訳」「漢書西訳」を行い、東西洋の「自他認識」を遂行した近代中国の知識人の一人であった。

## （二）蘭学・洋学の発達とその翻訳

幕末から明治期にかけて、日本の学問は、儒学から蘭学・洋学に転じ、次第に西洋文明の思想を形成していった。その際、近代日本の知識人は安易に外来思想を受容することなく、東洋の学問や価値観と葛藤しながら西洋文明の価値観を咀嚼し、情報を蒐集することによって、日本らしい実用性の高い学問を模索しようとした。

### （一）新井白石、高橋景保

江戸中期以降、新井白石（一六五七—一七二五）は積極的に西洋の情報入手し、『西洋紀聞』『采覧異言』を著した。また、徳川吉宗（一六八四—一七五二）は漢訳蘭書の輸入禁止を緩和し、「蘭学」が発展した。日本はオランダを通じてヨーロッパの情報や知識を手でできるようになった。即ち、徳川社会は鎖国状態にあったが、「蘭学」を通じてヨーロッパ世界との交渉パイプを保っていた。幕末維新期には、西洋近代文明を取り入れる「蘭

学」がさらに流行し、各藩武士の子弟は積極的に兵学や砲術を学び、これを国防の要とした。当時、「蕃書調所」には西洋知識を備えた多くの「蘭学者」が招聘され、高いレベルの教師陣が揃えられた。「蘭学」が流行するのに伴って、幕府は天文学者高橋景保（一七八五—一八二九）の建議を容れ、一八一一年、天文方に「蕃書和解御用」を設けて洋書を翻訳させた。また、幕府は西洋砲術の知識を得るため、一八四〇（天保一一）年に日本へ伝わったオランダ人 J. N. Calten 著の『海上砲術教諭手引き』(*Veidraad bij het Onderrigt in de Zee-Artilleri*, Delft, 1832) を訳出<sup>(36)</sup>させた。アヘン戦争後間もなく、『高島流砲術伝書』<sup>(37)</sup>『西洋銃陣図説』等、多くの翻訳が刊行された。特に天保期には、『砲彈製造教本』『粉砲考』等の技術書が相次いで翻訳された。弘化年間に翻訳された西洋砲術書は二十一種、嘉永年間には三十六種に及んだ<sup>(38)</sup>。こうした洋書翻訳の風潮は、近代知識人の西洋文明や科学技術に対する関心を呼び起こし、日本が開国へと向かう原動力となった。

## (2) 箕作阮甫

箕作阮甫は、一八三九（天保一〇）年に、幕府が西洋知識を持つ「蘭学者」登用のために設置した「蕃書和解御用」の翻訳官を命ぜられた。一八五三年六月、ペリーの最初の来航の際には、アメリカ大統領ミラード・フィルモア (Millard Fillmore, 1800-74) の国書を

翻訳するよう命を受け、また、同年七月には、ロシア使節エフイム・ワシリエビッチ・プチャーチン (Evfemi Vasiljevitch Putain, 1803-83) の国書も翻訳している。箕作阮甫はその外国語能力を十分に發揮して、外交文書や世界地理図誌を翻訳し、幕府の対外交渉のブレーンの一員となった。箕作の翻訳は、『和蘭文典』『海上砲術全書(共訳)』をはじめとし、語学・兵学・造船学・地理学などの諸分野に及び、百六十冊あまりの翻訳書を出した。

### (3) 佐久間象山

佐久間象山の場合は、辞書に頼りながら独学で蘭学を習い始めた。アヘン戦争勃発直後、彼は山寺源太夫宛ての書簡で、「西洋兵書を昼夜研精仕り候、近来は読候事も旧に比し候へば稍力を得善き、詞書に頼り熟考だに仕し候へばやや難解の所といへども、多く埒明き申し候」(一八四四年六月下旬)と述べている。また、「読洋書」では「壯年貴苦學、博涉宜無常、旁執西洋書、日日課數章。太易本無體、至神室有方、新舊互相發、斯理生輝光。心解真決河、沛然誰禦防、惜宋明賢學、與共此學場(壯年期には領域を問わず、大いに學問に励むべきだ。洋書を手にして、日々數章を読むと良い。太易はもとより形のないものであり、神室に至りて、その方法がある。新旧の學問を相互参照することによって、學理は明晰となり、惑を解くことができる。心中に確たる信念を以て、宋明の賢學と、この學問の場をともしに分か

ち合いたい)」（一八四四年六月作）と述べていることから、儒学を勉強する傍ら、日々身辺に西書を置いて読んでいたことがわかる。ペリー来航後の一八五八（安政五）年、象山は「釈氏」の中で、「至於太西之書、則今時吾輩皆知其讀法、誦說解釋與漢籍無差異、其言之有符、歴歴可証（西洋の書については、今に至って、吾輩はその読み方を知り、閲読と解読は漢文並みになり、論証にも根拠をもてるようになった）」と語っている<sup>(39)</sup>。アヘン戦争からペリー来航までの十数年の間に、佐久間象山はそれまでの儒学重視の姿勢から西洋知識重視の姿勢に転換していったことが窺える。

#### (4) 内藤湖南

「京都中国学」の創設者の一人である内藤湖南（一八六六—一九三四）は、一八九九年に中国を旅した折、改革派の張菊生（元濟、一八六七—一九五九）・嚴復・文廷式らと対談し、筆談記録「燕山楚水」を残している。そのなかに、中国で翻訳書の出版に力を尽くした張菊生との長時間にわたる対談の記録がある。張菊生は、「弊国前四十餘年より、已に変法の説あり、西人に效法する所の者、其事亦復少からず、而して成效茫然、且つ今の所謂洋務人材、亦祇だ其の皮毛を知りて、而して其神髓を得る能はざるは、則ち本を揣らずして而して末を齊しうし、人材培養を以て先と為す能はざるに由る也<sup>(40)</sup>」と、当時の中国の洋務

運動の空洞化を嘆いた。これに對して内藤湖南は、「洋務人材多く輕佻儂薄、敝邦前十年、亦復是の如し、専ら言語に敏にして、而して書を読み義を釋ぬるを會せず、意ふに数年の後、貴邦も潜思發明の人を出さん<sup>(41)</sup>」と答え、翻訳書を無視し、中国の人材育成が停滞していることに懸念を示している。また、内藤湖南が「嚴又陵（嚴復）天演論の若き、蓋しその先聲なり、貴邦人士、義理精透、此書の若きを喜ぶ者多きを得るや否や」と尋ねると、張菊生は、「天演論一書、自敝邦數十年譯書中最善本、喜讀者亦人に乏しからず<sup>(42)</sup>」と回答した。即ち、近代化を推進する中国の知識人には、翻訳書を通して西洋の知識を吸収することの重要性が徐々に認識されつつあったといえよう。本報告では、上述した近代日中の知識人が西洋の知識を吸収するために行った「漢訳西書」「和訳西書」「和書漢訳」の機能を論じた。

## 五 近代日中知識人の知恵と現代的意義

本報告で取り上げた十四人の「知識人」は、前近代の「士大夫」や「読書人」、あるいは単なるインテリではない。むしろ彼らは「近代化」における国家転換に直面した越境者であり、激動の時代の渦中で苦難や悲しみを乗り越えた啓蒙思想家であったと定義したい。

(二) 近代中国知識人の「日本観」をめぐる知恵

王韜・李春生・張德彝・梁啓超・林猷堂・戴季陶は、いずれも近代の中国・台湾の啓蒙思想家である。彼らは中華思想を背負い、孔孟の道における修身・齐家・治国・平天下の道德教育を受けて、儒教・漢学をはじめとする伝統的学問を根強く持ち、その学問的価値を捨てなかつた。西洋の近代思想の洗礼を受け、先進的な政治体制を模倣して、変法維新を推進しようとする時、彼らには「弱肉強食」「優勝劣敗」の潮流に合わない封建的儒教思想を厳しく批判する側面もあつたが、同時に道德を重んじる儒教的価値を堅く信じていた。いわば、彼らは「伝統」と「近代」の狭間で揺れた在野の知識人でもある。

アヘン戦争以降、中国は自強運動、「中体西用」などを図つたが、不平等条約による開港、日清戦争における敗北など、相次ぐ不運にみまわれた。「西洋の衝撃 (Western impact)」にさらされ、危機に瀕した中国、あるいは被植民地状態にあつた台湾において、西洋の自由・平等・民権を求めつつ、いかに自国の学問的価値を維持し、富強を達成していくか、知識人らは知恵を出し合つた。中華世界的学問の優越性と近代西洋文明との衝突に直面し、彼らは自らの思想様式 (アイデンティティ) を変化させ、その日本認識も一様ではなかつた。むしろ、他者に対する認識が不足し、齟齬のあつた「興亜」思想の危機から脱却する機会



を逃してしまったといえるかもしれない。ここでは、越境する近代中国知識人による「中国西用」の再認識及びその「日本観」を描き出そうとした。

## (二) 近代日本知識人の中国・アジア認識

幕末から戦前までの日本の中国・西洋認識について、個々の思想家・政治家、あるいは個別の事件をめぐっては、すでにおびただしい数の先行研究がある。しかし、近代日本の知識人の中国・アジア認識や「自他認識」を検討した研究は多くない。近代中国知識人の他者であった日本が西洋の学問、思想を受容する姿勢をより明確に描き出すため、本報告ではすでに述べたように、幕末から近現代までの日本知識人の思想主張を比較・検討する。先に取り上げた自由民権派の小室信介は、清仏戦争を観察した際、西洋列強に対抗するため、中日同盟締結を支持する傾向にあった。しかし、彼は清軍腐敗の実情を知って、それまで中国に抱いていた畏敬や崇拜の念を徐々に失い、侮蔑の念を持ち始めたといえる。竹内好は、歴史は未開から文明への一方通行だとする歴史観を軸にして世界を解釈する思想を「文明一元観」と定義し、日本がこの「文明一元観」を根底にして近代化を進め、国策を決定する傾向は、日清戦争の検証を経て定着し、一九四五年まで一度も変更されなかったとする<sup>(43)</sup>。また、近代日本の中国認識の枠組みについて、竹内は、「日本人の思想なり、

心理なりが全体として、戦前と戦後とで根本的に変化はない、そして、日本人のあらゆる中国観の根底に、意識するとせぬとにかかわらず、中国に対する侮蔑感がある」と判断する<sup>(4)</sup>。こうした侮蔑感はいつ現れたのか。福沢諭吉は極めて厳しい目で当時の中国の状況と民心の変化をとらえ、次のように述べている。

従来日本人は支那人を軽侮し、遅鈍なりと云ひしは大なる誤にして、之を實際に徴するに支那政府並人民とも決して遅鈍因循ならず。近く之を朝鮮政策に徴して、日本支那両国人を比較するに、孰れが遅鈍因循にして確たる定見もなく徒らに一日の安を偷まんとし、孰れが活発勇敢にして機に後れず其所思を實行し、傲然他をして睥睨して其恨悔煩悶するを笑ふの実ありとするか。我輩は之を言ふに忍びず。(『時事新報』一八八三・三・一三)

福沢は、清国の軍制や中国人の愛国心、技量に対する低い評価から、清国を降伏させることができる<sup>(5)</sup>と論じ、甲申事変に際しては日清の戦争を煽った。さらに、一八八五(明治一八)年三月一六日付の『時事新報』に「脱亜論」を発表した。この一連のアジア蔑視の思想について、安川寿之輔は、福沢が近代日本のアジア侵略思想とアジア蔑視観形成の最

大の立役者の一人であったとするならば、アジア太平洋戦争にいたる近代日本の道のりに対する「反省とけじめ」を「日清戦争にまでさかのぼるのではなく、さらに福沢の幕末啓蒙期にまでさかのぼって、問い直す必要があるとする<sup>(46)</sup>。つまり、竹内がいうように、この侮蔑感は「歴史的に形成されたものであって、具体的には日清戦争後の産物である。それは、日清戦争前の畏怖感を裏がえしたものである。この両者は、あらゆる場所で一方から他方へ容易に移るし、また混在することもできる<sup>(47)</sup>」。家永三郎が、「日清戦争は、従来先進文明国として、また大国として、とかく敬畏の目をもって見る傾きの強かった日本人の対中国観を一変させた」と指摘したように<sup>(48)</sup>、日本は日清戦争の勝利、台湾の植民地化、南満洲道付属地の獲得によって、ますます中国への優越意識を大きくした。この一連の歴史意識の変遷をめぐって、野村浩一は、近代日本の中国認識は「失敗の歴史」であるとし、この歴史は現在も基本的には変わっていないと指摘している<sup>(49)</sup>。

十九世紀後半の「西洋の衝撃」以降、日中間では「アジア主義」、「アジア連帯論」が言われ、また「興亜会」が成立する（一八八三年にアジア協会に改名）など、友好的な流れも形成されたが、他方で日本の対中侮蔑感や脱亜論などによって、葛藤の時期にもあった。「東アジア近代史の転換点」として日清戦争を起点とする近代日本の歪んだ中国ないしはアジアに対する認識が存在していた一方で、本報告では日本知識人がいかに自我を主張し、ま

た他者認識の思想がいかに変化したのかを明らかにする。また、近代中国知識人が再検討した「中体西用」と文明開化をめぐる日本知識人の「和魂漢才」から「和魂洋才」への転換に対し、思想交流史的にアプローチすることにより、その変遷の実態を把握し、日中両国における近代化の異同思想の本質を考察する。

ウエスタン・インパクト以降、日本における西洋思想の受容はさまざまな形態をとって行われたが、これは基本的には「伝統と近代」に関わっている。日本の伝統的学問（主に儒学）は中国的要素と切り離しにくいのが、日本にとつて儒教は外来の思想であり、中国の伝統儒教のあり方とは異なるといえる。しかし、日中の知識人は、その成長の過程や思想的背景が異なるとはいえ、共に儒教の教養や伝統的学問教育を受けたインテリである。例えば、塩谷宕陰は、理想的文明世界においては、表面的な技術の優位によって利益をひたすら追求するのではなく、必ず実践道徳の実学的態度を国家レベルにまで進めることが必要であり、且つ「礼楽和讓」の原則を守るべきであると考えた。佐久間象山は、儒教の立場と西洋科学の精神や技術を統合した。その根本的な意義は、精神面における伝統的価値理念（identity）の維持と、実用面における西洋文明の採用にあり、「截長補短」（長所を取って短所を補う）が「東洋道徳、西洋芸術」の基本理念であった。

また、箕作阮甫は、医学書・地理書や外交文書の翻訳を通じて、攘夷・開国期の幕府の

対外政策に貢献した。中村正直は「洋学者に転じた漢学者」と称され、その漢文著作は日本社会の啓蒙的意義と結びついて、注目を浴びた。<sup>30)</sup>岡千仞は漢学教育を重んじて、私塾「綏猷堂」を開くとともに、翻訳を通じた西洋知識の普及を志し、明治初期には『米利堅志』等を翻訳した。このように、近代日本知識人の思想を論考する際には、さらに歴史意識の内面に立ち入り、「自他認識」を通じて、彼らの中国・西洋への認識の真の姿を捉えなければならぬ。

## 結 語

近代日中における「東アジア」的発想に関する地域史研究の多くは、政治や経済を扱ったものであつて、文化的・思想的交流に関する論考は少ないようである。本報告は近代化における日本と中国の關係に重点を置き、日中知識人の思想変遷の歴史的文脈の中で、その主な思想・主張の裏に潜む価値体系を見出し、それぞれの「興亜」と「脱亜」の思想動態を提示し、「自他認識」の視点から考えるという問題意識に立っている。主として、日本を媒介とした西洋近代認識をめぐる思想交流の真相を明らかにし、過去の日中知識人の知恵を生かして、東アジア社会の現代的意義に示唆を与える分析を進めた。言い換えれば、

越境した知識人らの意識や行為が、過去において「伝統」のあった学問を従来の枠組みによって受け止める一方、いかに他者の良さを認識し、実用的なモダニズム (Modernism) Ⅱ 西洋世界の文明・秩序・制度・思想なども取り入れたかを比較分析した。また、当時の知識人らの自国に対する主張を再認識し、それを世界的枠組みの中に位置づけ、東アジアについて一種の共時性を持った文化・思想交渉史の実態を論じてきた。とはいえ、この分野の膨大な範疇からいえば、本報告が取り扱った内容はほんの一部でしかない。さらに「日中」という枠組みを超えて、問題を総合的に捉え直す必要がある。つまり、本報告はその第一段階として、十四名の知識人の「自我認識」「思想変遷」に焦点を据えた。この試みが、東アジア全体の人物思想交流史に発展する一つのきっかけになればと願っている。

注

- (1) ドナルド・キーン、芳賀徹訳『日本人の西洋発見』(東京：中央公論社、一九八二)、四七―四八頁。
- (2) 「伝統と近代」を思想転換との関連から捉えようとする論考には次のものがある。松本三之介『明治思想における伝統と近代』(東京：東京大学出版会、一九九六)。同『近代日本の中国認識——徳川期儒学から東亜協同体論まで』(東京：以文社、二〇一一)。依田憲家教授還暦記念論文集編集委員会『日中両国の伝統と近代化』(東京：龍溪書舎、一九九二)。佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』(東京：東京

大学出版会、一九九六)。徐水生著、阿川修三・佐藤一樹訳『近代日本の知識人と中国哲学』(東京・東方書店、二〇〇八)。山室信一「アジアにおける思想連鎖」同『思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企』(東京・岩波書店、二〇〇二)所収、藤田雄二『アジアにおける文明の対抗——攘夷論と守旧論に關する日本、朝鮮、中国の比較研究』(東京・御茶の水書房、二〇〇一)。狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』(京都・京都大学学術出版会、二〇〇一)。金鳳珍「伝統と近代の間、そして現代と将来」同『東アジア「開明」知識人の思惟空間』(福岡・九州大学出版会、二〇〇四)。余項科『中国文明と近代的秩序形成』(京都・朋友書店、二〇〇四)。飯田鼎「幕末・維新時の思想家にみる啓蒙と抵抗」同『幕末・明治の士魂——啓蒙と抵抗の思想的系譜』(東京・御茶の水書房、二〇〇五)。松田宏一郎『江戸の知識から明治の政治へ』(東京・ペリかん社、二〇〇八)。

(3) アジア人の世界「発見」について、藤間生大は、魏源のアヘン戦争敗北の反省や一八四〇年代から中国の思想変革の方向について述べている。詳しくは氏の「近代成立期の中国人の思想変革——魏源を中心」同『近代東アジア世界の形成』(東京・春秋社、一九七七)、七三—一五九頁参照。近代日本と西洋との出会いについては、野田又夫・田丸徳善・峰島旭雄編『近代日本思想の軌跡——西洋との出会い』(東京・北樹出版、一九八二)を参照されたい。

(4) 山室信一「知の回廊——近代世界における思想連鎖の一前提」溝部英章執筆者代表『近代日本の意味を問う』(東京・木鐸社、一九九二)、一一六頁。

- (5) 「自我認識」及びその意味に近い用語を用いて研究した論著は、桂島宣弘「宣長の「外部」——十八世紀の自我認識」「思想」(九三二号、二〇〇一)所収。同氏「華夷思想の解体と自我認識の変容——十八世紀末期—十九世紀初頭期を中心に」島園進ほか編『岩波講座 近代日本の文化史二卷 コスモロジーの「近世」』(岩波書店、二〇〇一—二〇〇三)所収。同氏「洋学思想史の一考察——自我認識の視点から」『日本思想史研究会会報』(二〇号、二〇〇三)所収。同氏『自我認識の思想史』(有志舎、二〇〇八)。西田毅編『近代日本のアポリア——近代化と自我、ナシヨナリズムの諸相』(京都・晃洋書房、二〇〇二)。加藤尚武編『他者を負わされた自我知——近代日本における倫理意識の軌跡』(京都・晃洋書房、二〇〇三)。山室信一「空間認識の視角と空間の生産」同氏編『岩波講座「帝国」日本の学知第八卷 空間形成と世界認識』(東京・岩波書店、二〇〇六)、一一—一八頁所収。桐原健真「吉田松陰の思想と行動——幕末日本における自我認識の転回」(仙台・東北大学出版会、二〇〇九)。松田宏一郎「「亜細亜」の「他称」性」前掲同氏著書、一七九—二四頁所収など、一連の研究がある。
- (6) 大村斐夫宛ての著作阮甫書簡。玉木存「開国——著作阮甫と川路聖謨」(創林社、一九八三)、一三頁。
- (7) 佐久間象山『省魯録』、宮本仲「佐久間象山」(東京・岩波書店、一九三二)、二七一頁。
- (8) 丸山真男「福沢の儒教批判」『戦中と戦後の間』(東京・みすず書房、一九七六)、九六頁。
- (9) 李曉東『近代中国の立憲構想——嚴復・楊度・梁啓超と明治啓蒙思想』(東京・法政大学出版局、二〇〇五)、一一二頁。



- (10) 前掲李曉東著書、二二一頁。
- (11) 前掲松本三之介『近代日本の中国認識』、一五〇頁。
- (12) 卞崇道『日本近代思想のアジア的意義』（東京：農山漁村文化協会、一九九八）、一四四—一四六頁。
- (13) 張玉萍『戴季陶と近代日本』（東京：法政大学出版社、二〇一一）。
- (14) 戴季陶『日本論』（上海：民智書局、一九一八、再版）、七八頁。
- (15) 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』（京都：同朋舎出版、一九八四）。大庭脩著、戚印平・王勇・王宝平訳『江戸時代中国典籍流播日本之研究』（杭州：杭州大学出版社、一九九八）を合わせて参照されたい。
- (16) 詳しくは松浦章「幕末明治期における漢学受容の変容——漢譯西洋書の受容」『アジア文化交流研究』（第五号、二〇一〇年二月）を参照されたい。
- (17) 詳しくは山室信一「日本学問の持続と転回」松本三之介・山室信一校注『日本近代思想大系一〇 学問と知識人』（東京：岩波書店、一九八八）、四七五—四八二頁を参照されたい。
- (18) 前掲山室信一「知の回廊」論文、一三四頁。
- (19) 日本報告の中国語訳については、実藤恵秀『中訳日本報告目録』（国際文化振興会、一九四五）参照。
- (20) 『天学初函』は、「理編十種」（天主教理、西洋學術概要、世界地理など）と「器編十種」（数学、天文、水利など）の翻訳書が収録され、計二十編となっている。

- (21) 嚴復「原強修訂稿」、王栻『嚴復集』（北京：中華書局、一九八六）、二〇頁。
- (22) 詳しくはB・I・シユウォルトツ（平野健一郎訳）『中国の近代化と知識人——嚴復と西洋』（東京：東京大学出版会、一九七八）を参照されたい。
- (23) 『康南海自編年譜』（北京：中華書局、一九九二）、九—一〇頁。
- (24) 同右注、一四頁。
- (25) 『日本書目志』は現在までに上海大同訳書局刊本（一九九七）、台湾宏業書局影印本（一九七六）、上海古籍出版社標点本（一九九二）、中国人民大学出版社（二〇〇七）などの版本がある。
- (26) 『日本書目志』、『康有為全集』第三集（北京：中国人民大学出版社、二〇〇七）、二六三頁。
- (27) 『日本書目志』の「按語」（コメント）について、沈国威「康有為及其『日本書目志』」（『惑問 WAKUMON』No.5（二〇〇三））を参照された。
- (28) 『日本書目志』、『康有為全集』第三集（北京：中国人民大学出版社、二〇〇七）、三二九頁。
- (29) 同右注、三五七頁。
- (30) 同右注、三五七頁。
- (31) 同右注、四一九頁。最近、康有為の『日本書目志』編纂の独創性をめぐる論考が出ている。特に王宝平「康有為『日本書目志』出典考」、『汲古』第五七号（古典研究会編、二〇一〇・六）において、『日本書目志』と『東京書籍出版業者組合員書籍総目録』（『書籍総目録』一八九三七）とを分類比較し、『日本書目志』

の編集方法は『書籍総目録』に基づいたものと指摘し、『日本書目志』未収書の原因究明について論じている点が注目される。

(32) 詳しくは周文莉「王國維的創立與近代文學的創立」、『吉林化工學院學報』二〇一〇年第五期を参照されたい。

(33) 梁啓超「飲冰室文集」之二、『飲冰室合集』（北京：中華書局、一八九八）、五七―五八頁に収録。

(34) 梁啓超『清代學術概論』、『飲冰室合集』專集之三十四、六五頁。

(35) 『飲冰室合集』文集之二、中華書局、六八頁。

(36) 該書が『海上砲術全書』（二十八卷十四冊、海上砲具全図附）として発行されたのは、完成から十二年後の、一八五四（嘉永七）年ベリー二度目の来航時であった。

(37) 『高島流砲術秘伝書』は、一八〇七年にロッテルダムで刊行されたメーレン (L. van der Muelen) 著『砲術入門』(Handeling in de Artillerie : bestemd tot het geven von onderwijs, op het Kadetten Instituut der Marine von Zijin Majesteit den Koning Von Holland, 1807) を翻訳し、独自に編集し直したものである。この蘭書は、高島秋帆の注文によって、一八三七（天保八）年長崎に入港した蘭船・トゥヴェー・コルネリッセン号が船載したものである。

(38) 佐藤昌介『洋学史論考』（京都：思文閣出版、一九九三）、三〇〇―三〇二頁。

(39) 池田哲郎「佐久間象山と蘭学」『福島大学学芸学部論集』第一〇（二）号、一九五九。

- (40) 「燕山楚水」『内藤湖南全集』第二卷（東京：筑摩書房、一九七二）、一〇二―一〇三頁。
- (41) 前掲内藤湖南「燕山楚水」、一〇三頁。
- (42) 前掲内藤湖南「燕山楚水」、一〇三頁。
- (43) 竹内好「日本人とアジア」『竹内好全集』第八卷（東京：筑摩書房、一九八〇）、六九頁。
- (44) 竹内好「日本人の中国観」『竹内好全集』第四卷（東京：筑摩書房、一九八〇）、八―九頁。
- (45) 伊藤之雄「日清戦前の中国朝鮮認識の形成と外交論」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』（京都：京都大学人文科学研究所、一九九四）、一一七頁。
- (46) 安川寿之輔『福沢諭吉のアジア認識』（東京：高文研、二〇〇〇）、二二〇頁。
- (47) 前掲竹内好「日本人の中国観」、九頁。
- (48) 家永三郎「中国・朝鮮に対する政策・意識の根本的な誤りと歪み」『太平洋戦争』（東京：岩波書店、二〇〇二）、二二―二四頁。
- (49) 野村浩一『近代日本の中国認識―アジアへの航跡』（東京：研文出版、一九八二）、四七頁。
- (50) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク』（名古屋：名古屋大学出版会、二〇〇六）を参照されたい。

## 発表を終えて

日文研で一年間の研究活動の機会に恵まれたことは、1997年4月から天理大学に客員教授として長期滞在して以来、13年ぶりのことでした。日文研の図書館には、24時間体制でいつでも利用できる便利さ、他の施設から図書の取り寄せや文献の相互利用のシステムが整っており、大変助かりました。また、毎週のように異なる分野の研究会が開催され、広く日本文化の分野に関心を持つ世界各国の研究者と頻繁に会って、交流することができました。多くの先生方から学恩を蒙ることができ、私の視野は大いに広がり、研究は大きく前進しました。この国際文化交流、学術交流を重んじる研究機構で、久しぶりに落ち着いた研究の機会を与えてくださった関係各位に深謝致します。

この度、日文研フォーラムにてコメントーターをご担当くださった劉建輝先生、準備委員会の佐野真由子先生、また研究協力課の皆様方には大変お世話になりました。ここに感謝の意を表するとともに、当日ご出席くださった稲賀繁美先生、井村哲郎先生、郭南燕先生、京都大学の辻元雅史先生、また私と同時期の外国人研究員である楊曉捷先生（カナダ・カルガリー大学教授）、劉岳兵先生（中国・南開大学教授）、大貫恵美子先生（アメリカ・ウィスコンシン大学教授）から学問的、知的刺激を受け、ご教示を賜りました。諸先生方に心より感謝申し上げます。

なお、私の発表に対し、ご参加の方々から「今日の台湾における思想的主流は何でしょうか」、「江戸時代から現代に至るまで、日本と中国の儒教思想は、果たして同一の思想であったと言えるでしょうか」など様々なご意見が寄せられました。これらのご質問は、この研究課題のさらなる発展のために、大変貴重なものと受け止めております。

日文研での滞在中、旧知の情を暖めることができ、また新しい出会いもありました。日本各地の諸公私機関での資料調査を終えてからは、京都の美しさをじっくり散策し、伏見稲荷神社、宇治の黄檗萬福寺、平等院などの寺社を巡礼することもできました。これらの体験を良い思い出として大事にし、また今後の国際学術交流にも生かしたいと思っております。この冊子が、近代日中知識人の「自我認識」の一角を知っていただくための一助になれば、と願っております。

徐興慶